

—モラヴィア動物寓話集—

眠くて死にそうな勇敢な消防士

アルベルト・モラヴィア——千種 堅訳



眠くて死にそう な勇敢な消防士

—モラヴィア動物寓話集—

アルベルト・モラヴィア — 千種 堅訳



早川書房

STORIE DELLA PREISTORIA

by Alberto Moravia
Copyright © 1982
by Alberto Moravia
Copyright © 1982
by Gruppo Editorial
Fabbri-Bompiani, Sonzogno,
Etas S. p. A., Milano
First published 1984 in Japan
by Hayakawa Publishing, Inc.
This book is published in Japan
by direct arrangement with
Eulama S. r. l.

検 印
廃 止

眠くて死にそうな
勇敢な消防士

昭和59年 9 月30日 初版発行

著 者 A・モラヴィア

訳 者 千 種 堅

発行者 早 川 清

発行所 株式会社 早川書房

東京都千代田区神田多町2-2

電話 東京 (252) 3111(大代表)

振替 東京・6-47799

印刷所 中央精版印刷株式会社

製本所 中央精版印刷株式会社

定価 1500円

眠くて死にそんな勇敢な消防士

——モラヴィア動物寓話集——

日本語版翻訳権独占
早川書房

© 1984 Hayakawa Publishing, Inc.

目次

ワ・ニ、ソリハシ・セイタカ・シギそして踊る魚	7
ク・ジラが、うんと小さかったとき	17
きれいなありは皇帝の値打ちがある	27
考えたことが空中で凍りつけば	39
氷を信じる哀れなダイ・ペン・ギン	49
キ・リンが自分を探す	63
こ、う、の、と、り、の、ひ、な、な、ん、か、愛、し、て、も、仕、方、が、な、い	73
良縁は鼻に始まる	87
洪水、世界の終末、その他その他	97

ズボンなしには通いあうところなし 107

ママの夢が怪物を作る 119

眠くて死にそうな勇敢な消防士 129

ザイルル河の流れにのって 141

ア・ダ・ムとイ・ヴのあの怠け者たち 151

ハ・タとイノ・シシ、偽りの愛 167

カメ・レ・オンは、どうやって緑、薄紫、青になったか…… 175

きょう、カ・ミ・サ・マがめざめたら、たいへんだ 183

一角獣とサ・イ 197

キョウ・リュウの跳躍 207

ラ・クダの角 215

秤よ、おまえをにくむ 223

そして氷の王冠は消えた 235

母なる自然は、世界を変えることに決める 249

美女と野獣 259

訳者あとがき 271

装幀・挿画／飯野和好

ワ・ニ、ソリハシ・セイタカ・シギそして踊る魚

ワ・ニ（鰐）は子供のころは食べるのに何の不自由もなしにきた。ママが大きなスプーンで食べるのに慣れさせてきたからで、スプーンにあらゆる種類のおいしい魚を山とよそってくれた。朝は朝食に一匙、お昼は昼食に一匙、夜は夕飯に一匙。復活祭、クリスマス、新年は三匙ではなく、合わせて六匙。でもママはよく息子にいつていた。「ワ・ニや、いつかわたしのいなくなる日が来るんだけれど、どうするつもり？」だが、ワ・ニは気に留めないふりをしていた。

ある日、ママがいなくなった。ワ・ニはいつもどおり、さびしい浜に出て、じっと動かず、口を開けたままだった。一匙ももらえなかった。

一日が過ぎ、また一日が過ぎ、それでもやはり一匙ももらえなかった。

ワ・ニは心配になりだした。せいっぱい口を開けて、絶望的に呼んでみた。「ママ、ママ、ママ、ママはどこ？」すると、すぐそばでこういつてくれる小さな声が聞こえた。「かわいそうな、

ワ・ニ、きみは知らないのね、ママってひとりしかいないんだよ。きみのママはもういないのよ」ワ・ニはふりかえってソリハシ・セイタカ・シギを見たが、こちらはバビルスの草の間を選び好みしてついでにみながら、そばで跳びはねていた。口をきいたのは彼女だった。そして事実、しばらくしてこうつけ加えた。「早いとこ、どう解決するか決めてね。わたしはきみの齒の間に残っている食べ物の余りで生きてるんだもの。きみが食べないと、わたしも食べないことになってよ」ワ・ニはたずねた。「ぼくはどうしなくちゃいけないんだい」ソリハシ・セイタカ・シギは答えた。「考えるのよ」、「で、どう考えなくちゃいけないんだい」、「考えるのよ」

ワ・ニはソリハシ・セイタカ・シギの忠告にしたがった。考えはじめたのだ。そして考えも考えたり、一度も考えたことのないことを考えた。

ワ・ニが途方もない口の持主だというより、全身これ口だといってもいいことを知らなくては行けない。口にはやたらたくさん歯と、それに柔らかな絨毯を敷いた床にも似た実に長い、すべすべの、滑らかな舌があった。

今度はワ・ニがソリハシ・セイタカ・シギにいった。「ねえ、きみ、このあたりの魚たちみんなに知らせてきてくれよ、ぼくが踊りの店を開くことに決めたって。つまりダンスホールだよ。店はぼくの口。椅子とテーブルはぼくの歯さ。ダンスをする場所はぼくの舌。バンドは舌の先に置いてやろう。急いで飛んでいて、魚たちに知らせてやっておくれ、今夜にもオーブニングをやるって、大パーティーを開いて、ご婦人方には高価なプレゼントがあるって」

ソリハシ・セイタカ・シギは、同じことを二度といわせなかった。河面を飛んで、これが後のナイル河だったが、上手に宣伝をして、息を切らしながら繰り返したのだった。「今夜、ワ・ニの口で大ダンス・パーティー。入場無料。夜中まで踊れます」

考えてもみられない、魚たちはかわいそうに河底で退屈している。一日中、水草の間をさまよい、おたがいにかめ面をしてみせるほかには、何もやることがなかった。そこで「金魚」という看板の出ているワ・ニの新しいダンスホールに大挙して集まろうと決めた。

夕方になった。ギター、打楽器、サキソフォンを持った五匹の蛙から成るバンドが、ワ・ニの舌の先でバランスを取りながら息を切らせて演奏していた。魚たちは行列を作ってぞろぞろと水から出てくると、段をよじのぼり、ワ・ニの口に入っていた。魚たちの目の前に、赤紙の提灯でにぎやかに飾った長々とつづくホールが現われた。ホールの奥には横長の垂れ布が下がっていて、「お楽しみ下さい」と書いてあるのが読めた。魚たちはワ・ニの歯に腰かけ、飲物を注文し、踊りはじめた。これまでに魚の踊るのを見たことがおありかな。そう、とにかく百匹の魚全部がいっしょに踊るのを見たらどんなものか、想像していただきたい。

その間、ワ・ニは口を大きく開き、目を細めて、じっと動かずにいた。待っていたのだ。

ダンスにつぐダンス、そしてワ・ニは待っていた。きっかり真夜中になったところで、「皆さま、閉店です」と告げることに決めてあった。それと同時に本当ならその途方もない口を閉じて、おいしい、新鮮な、それも生きたままの魚で満腹するはずだった。

さて、いま魚たちの中にはとても知恵のあるチョウ・ザメというのがいた。

ダンスとダンスの間に、ダンスホールをぶらぶらしながら、チョウ・ザメはワ・ニの口の上の方、円天井のようにカーブしたあたりから、大きな水滴のしたたり落ちてゐるのを認めた。これらの水滴はひとりでに形作られ、形ができると、とたんに落ちてきた。実はワ・ニはこれら最高の魚を全部食べる瞬間を心待ちにするあまり、口の中によだれがたまっていたのだ。

チョウ・ザメは気がかりになったので、ソリハシ・セイタカ・シギのところに行き、自分の発見を伝えた、あの水滴は一体何かしらと。さてこのシギというのが自分の身にわざわいがおよぶとわかっていても、秘密を守れないタイプだった。いちおう説明しようとやってみた。「あのね、わたしたち河面にいるでしょ、湿気がたいへんなの」だが、チョウ・ザメがすぐにいった。「ソリハシ・セイタカ・シギよ、きみはそれでも脚が長いだろ。用心するんだな、あんまり嘘ばかりついていると、竹馬みたいな脚になっちゃうよ」すると、いまにも一切がっさい口をすべらしたくてうずうずしていたこのシギは、本当のことを話した。チョウ・ザメはもうぐずぐずしていられないと察した。河にとびこんで、巨大な丸い石を口にくわえると、ワ・ニの口の奥の方、上の歯と下の歯の間に置きにいったが、くるみでも割ろうというようだった。それから満足すると、かねていい寄ってきたコ・イ（鯉）という娘をサンバにさそいにいき、いっしょに踊った。

夜中になって、ワ・ニは目を見開き、胸間声で叫ぶ。「みなさん、閉店です」と同時に口を閉じ、こうして自分の舌の上でなおも結構楽しんでる二十キロないし三十キロの魚を食べようという寸



法だ。ところが、がちっ！二本の歯がチョウ・ザメの石にぶつかったが、噛み砕くまではいかなかった。口は開いたままだった。そしてワ・ニは鋭い、刺すような、恐ろしい痛みを覚えた。

その間に魚たちは閉店を告げる胴間声とともに、さっさと帰っていった。それでも、ぶつぶついうものもいた。「何というやり口。こんなに楽しんだというのに！」

翌朝、もちろんチョウ・ザメは一切を魚たちに話し、魚たちはその日以来、注意してワ・ニのダンスホールには二度と行かないようにした。

ワ・ニはそのとき以来、さんざん努力して、ときどきナイル河を転がり、食べるものを何かと探しに出かけるようになった。ただし、獲物は少ない、というのも魚たちは遠くから見ただけで、これを避けてしまうからだ。ただ、これまた怠けもののうなぎだけは、臨機応変に動けないとあって、ワ・ニはまるでスバゲッティのようにすすっている。

残りの時間、ワ・ニは砂の上に横になって、煙と消えた食事のことを考えながら、苦い涙を流している。まさに「わにの涙」（イタリヤ語で空涙のこと）だ。

ソリハシ・セイタカ・シギはその相手を勤めて、何かにつけてたずねる。「どうしたの、なぜ泣いているの」

ワ・ニは返事をする。「本気であの魚たちを食べるつもりだったからね、それを思っ泣いているのさ。でも、一体、誰がスパイをしたのか、わからないかなあ」

すると、ソリハシ・セイタカ・シギが無邪気にいった。「誰もスパイなんかしてなくてよ、あ